

基調講演

『潟』文化論—低湿地で生かされた人びとの生活—

菅 豊（東京大学 東洋文化研究所 教授）

私の専門は民俗学で、その中でも特に自然に関するもの、人と動物の関係史と呼んでいます。人が動物を利用したり、人が動物と付き合ったり、関係してきた歴史について研究しています。今日は、その研究の一環で導き出したさまざまな知見をお話しできたらと思います。



1. テーマ「潟」

今日のテーマは「潟」です。「潟」は皆さんご存じですね。辞書的な意味は大きく二つに分かれます。一つ目は、「遠浅の海岸で満潮のときは隠れ、潮が引くと現れるところ。しおひがた。ひがた」です。二つ目は、「外海と分離してできた湖や沼、そしてその沼地の周りにある低湿地」です。砂がずっと堆積して、砂嘴（さし）や砂州（さす）、沿岸州などによって海の一部が外海と隔てられて、湖状になります。その湖状になったところを「潟湖（せきこ）」と呼びます。今日はこの二つ目の話が中心で、潟湖、潟、さらにそれと類似した環境空間である低湿地についてまとめて話したいと思います。

この潟という空間は、今は皆さんにあまりなじみはないかもしれませんが、子どもの頃関わったという方がいらっしゃるかと思います。現在は、この潟という空間はどんどんなくなっていますが、それはまさに今日の日本海学シンポジウムにぴったりのテーマで、日本海にはとても広く分布していました。この潟というのは、日本海の自然環境の代表的な特徴の一つと言ってもいいと思います。太平洋側にもないわけではありませんが、基本的には日本海側に非常に卓越して分布します。日本海側には、この砂嘴や砂州、沿岸州などによって、海の一部が外海と隔てられてできた潟湖が発達し、その周辺には水界と陸界との境界である潟、低湿地が広がっていたのです。

低湿地というのは、水が多い、じめじめしているところです。これはあまりいいイメージではなく、低湿地や潟に家を建てる人はあまりいないと思います。低湿地の過剰な水は生産面、あるいは生活面でとても不利な条件とされてきました。そのために、近現代の日本、明治以降、そして特に第2次世界大戦後は、この潟が埋め立てられて潟湖を含む多くの低湿地が失われています。

潟は増えることはありません。どんどん減っていくばかりです。今日の講演では、近代の低湿地が消失する以前の潟の苦難の歴史、さらに、これと全く逆に、魚や鳥など豊かな資源を利用し、その利用を楽しんでいた豊かな歴史、この二面性を持った歴史についてお

話したいと思っています。

2. キーワード「半」

「潟」というテーマに対して今日はもう一つキーワードがあります。それは「半」です。「丁か半か」の「半」ですが、これもまた、先ほどの低湿地と同じでありあまり良いイメージはありません。辞書では、例えば「半ば（2分の1・半分）、不完全（半端・半熟・半可通）、途中であること、2で割り切れない」という意味があります。今日のお話は、この「不完全」もキーワードになります。半という言葉にこの不完全という意味を込めています。

この「半」という言葉は、半ばであり不完全であり、まだ途中であり、さらに割り切れないという状況を表します。この半に対して反対にある言葉は「全」です。不完全というものが半だとすると、完全というものが対極にあるのです。

今日お話しする潟という空間は、まさにこの半の空間です。要するに全に向かう、埋め立てるまでの半ばであり、不完全であり、まだ途中であり、そして何か割り切れないような空間です。この潟というのは、不完全で人々に苦難を与えてきました。しかし一方で、人々はこの半の状況に苦しみながらも、周りにあるものをうまく使いこなして何とかやっていくという生活の技芸と知識と想像力を磨き、その状況を楽しんでいました。

まさに近現代、皆さんが生きてきた歴史というのは、この半から全へと転換してきた時代だったのです。今日はそれを潟というもので見ていきたいと思っています。

この後、幾つもの潟をご紹介します。最初はやはり富山からまいりましょう。幾つか日本海側から紹介して、その後、太平洋側の低湿地をご紹介します。

3. 「半」としての射水平野

最初は、富山にお住まいの皆さんはご存じの射水平野です。この平野の一番北側のところに、現在、富山新港という非常に立派な港があります。そこはかつて放生津潟（ほうじょうづがた）と呼ばれる潟湖でした。

潟湖ができる仕組みについてちょっと解説しましょう。縄文時代は今と同じで非常に温暖でした。そのため海面が上昇します。そうすると当然、ずっと内陸まで水が入ってきます。縄文時代には、われわれが今いるこの会場辺りから北西を見渡せばもう海、入江がずっと入っているような状態でした。これは縄文時代の縄文海進と呼ばれているものです。それで、さらに海流の流れなどで砂がたまってきます。砂がたまると、内側のところが湖になります。これが潟湖です。

富山県のホームページに非常に分かりやすい説明があったので引用させていただきます。「縄文時代前期である約6000年前は、温暖化による気温上昇により、海面が今より4～5m高かったといわれています。富山県では、現在の射水平野の範囲がほとんど水没し、潟湖（旧放生津潟、現富山新港）の汽水域が広がっていました」。汽水というのは海の水と淡水とが混ざっているところです。「この潟湖の湖岸付近には、小竹貝塚のほか、蜆ヶ森（しじみがもり）貝塚や、針原（はりわら）西遺跡などの貝塚が知られています」。

標高が5mあたりのところまで、今、新幹線が走っているところの南側まで入江が入っていて、その縁状のところまで人々が住んで生活を営んでいたということです。そして、砂州が入ってきて、だんだんと陸地化が進んでいきました。陸地化については、6000年前の

縄文時代から自然にだんだん埋まっていきました。新しい時代には人間が埋めることももちろんありましたが、自然と埋まっていきました。そして、最後の部分が少しずつ小さくなって、残ったところが放生津潟になります。

図表 8 は、1952 年の放生津潟で、潟がどんどん小さくなった後の最後の潟です。そしてこれを改造してできたのが富山港です。射水の商工会議所のパンフレットになかなかいい文章が載っていました。この空間がまさに半の空間だったということを言い得ています。

タイトルは「恩恵と試練。絶妙な水位の境目で」です。恩恵はプラス、試練はマイナスです。まさに半です。「放生津潟周辺に住む人々は、古くから半農半漁の暮らしてました。コイ、フナ、ウナギ、ナマズなどが生息する天然の養魚地であり、周辺の肥沃な湿地では稲作が行われていました」。これはプラスです。とてもいいことです。天然の魚もたくさんいます。「一方で、放生津潟には多くの河川が注いでいるため、大雨のたびに潟周りの民家や農地が浸水しました」。いわゆる洪水、大水です。「そこで、海に近い潟の境界線を人力で掘り抜き、海へ排水したのです。この場所は『堀切』と呼ばれました。ただし、排水できても安心はできません。水位が低いままで満潮を迎えると、今度は潟周りの田んぼに海水が逆流し、塩害を引き起こすのです。逆流を防ぐため、今度は土のうを積み上げて堀切を封鎖する必要がありました。

人々に恩恵と試練を与えてきた放生津潟の面影は、今の富山新港の周辺にも実はいろいろ、残っているのです（『新湊 潟&港さんぽ』）。

まさに半の空間としての潟というものを言い得ている。良いところもあれば悪いところもあったという内容だと思います。

この放生津潟の後ろ側、射水平野全体が半の空間でした。射水平野そのものが水に脅かされる生活空間であり、低湿地の負の側面がありました。「馬入らず」と呼ばれていたようです。農耕馬が入れないほどの低湿地帯で、98.8%が湿田です。乾田はわずか1.2%で、本当にじめじめした田んぼばかりでした。収穫時には、台風で洪水になると、田んぼは辺り一面、湖のようになってしまいます。農地の大部分が水に浸って農作業は大変な目に遭います。

地方独自のさまざまな知恵と工夫を人間はしてきました。この射水平野での工夫の一つは、当然、運搬には牛や馬やリアカーは使えないので、舟を使ったことです。その舟も田んぼには大きな舟は入れないので、小さな底の平らなものを使いました。「田舟」と書いて「タズル」と読みます。引きずるから「ズル」と呼ぶそうです。そのタズルを押しながら稲刈りをしたり、肥料をまいたり、運んだりしました。そして水路まで持っていく、今度はイクリと呼ばれる舟に移し変えていくという、結構手間のかかる大変な作業が、そうした低湿地に適応した技術を編み出しました。

このタズルやイクリとともに、この地の人々がさらに編み出したのが、水路を造るということです。覚えている方が皆さまの中にもいらっしゃると思います。射水平野にはこのような景観があったそうなのです。私はもちろん見たことはありません。水路を農民が手掘りしていきます。その水路が壊れないように、水路の縁にタゴの木を植えます。射水辺りではトネリコの木をタゴの木と呼ぶようです。水に強い木のようなのです。さらに、収穫した稲を干す「はざかけ」をするための木としても使われました。写真を見ると、悠長なことを言うと、きれいな、美しい景観に見えます（図表 10）。そして、ここはまたフナやコ

イ、ウナギ、ナマズなど潟の産物がたくさん捕れる天然の養魚池と呼ばれていました。

4. 「半」から「全」へ

こうしたプラスの側面があるのですが、人々は結局、マイナスの側面、稲作あるいは生活の中の水の問題を克服する方がより重要になって、魚などの利益の方を捨てて埋め立てるという選択をしていきます。射水平野では、射水平野土地改良事業を昭和 38 年から 14 年間かけて行われました。そして今では、日本有数の穀倉地帯、きれいな田んぼ、そして工業地帯にもなりつつありますけれど、そういうものが出来上がりました。

いわゆる半の空間から全というものによっていくこの流れ、射水平野の歴史というのは、全国における潟の歴史の一つの典型例と言っていると思います。他の多くのところでも、ほぼ同じように、干潟、潟湖をだんだん田んぼにしていって、陸地化していくという流れを第 2 次世界大戦を境に行っています。

もう一つ富山の事例をお話ししたいと思います。今日、氷見からいらした方はおられますか。おられないでしょうか。氷見ご出身の方や、氷見のご出身でなくても行かれた方もいると思いますが、氷見に十二町潟というものがあります。氷見の駅から南西方向にある、細長い、天然記念物オニバスで有名なところですが、ここも実は潟湖です。縄文海進で、ずっと下の方まで湖が広がっていました。そして、沿岸流のために砂がたまって、入江のところをふさぎ、湖になり、だんだんと陸地化していきました。今は十二町潟のところだけしかそうした面影を残していないように見えるのですが、ほんの 50~60 年前までは、周囲にもそのような形跡が残されていたのです。

私は今年還暦なのですが、私が生まれた 1963 年 10 月の十二町潟の写真を見ると、きれいな田んぼになっているところがある一方で、今の地図で言うと、万尾川という地域と、現在の運動公園になっているところに、何か変なものもやとしたものが見えます(図表 14)。それを拡大すると、ペルーのナスカの地上絵のように、地上に何か刻まれています(図表 16)。何か絵を描いたように見えるのです。私はこれを「地上絵」、あるいは迷路のようなので「水辺のラビリンス」と呼んでいるのですが、これは十二町潟の付近では「ハダコ」と呼ぶそうです。水田なのです。掘り上げて溝を作って、地面を高くしていきます。掘ったところは今度は地面が低くなりますから、このような溝状になっていく、これを「ハダコ」といいます。このハダコが十二町潟にかつて見られました。ナスカの地上絵の鳥のようにまでは見えませんが、ハダコも幾何学模様でなかなか美しいものだと思います。

5. 江戸時代に登場した堀上田

このハダコは、学術的な表現では「堀上田」と呼ぶ水田工法です。簡単に言うと、地下水水位が非常に高いのです。いわゆる低湿地です。そうすると、例えば水面があつて、地面がそれより随分下だと稲作ができません。どうするかというと、仕方がないので、土地が半分なくなるのを覚悟で溝を掘って、溝の分を隣に載せていきます。そうすると当然、植えられる土地の面積は 2 分の 1 になります。これは生産高を上げようと思うとやはり不利な工法です。不利だけれど、半分捨てて半分取るという妥協、まさに「半」の工法です。

ただ、この掘りつぶれも全くの無駄ではなく、実はこれがまた重要な意味を持っています。今日の潟の文化の中で特に出てくる多様な資源です。魚、鳥、貝類、あるいは水草、

マコモやヨシなどさまざまなものがここで得ることができるのです。ですから、意外とこのところは、ばかにできない空間です。

どうしても稲作中心の感覚では、「ああ、この人は米が半分しか取れなくてかわいそうだな」というような目で見てしまうのですが、現実、大変なのは大変なのですが、そのように、多資源適応、多くの資源に適応できるような環境ができていきます。それを意図して作ったわけではなく、この工法をすることによって、そのように緩やかな、あるいは豊かな自然環境が逆につくられていきました。人間の働きかけによって自然が逆に豊かになるという、不思議なというか、よくありがちなのですけれども、そのような空間になります。

この堀上田というのは意外と古くからあり、これは私にとって、昔から研究してきたのにまだ謎なのです。江戸時代の18世紀末、19世紀に入ろうとしている寛政6年に、大石久敬という人が書いた『地方凡例録』という、いわゆる行政書があります。行政のさまざまなやり方について書いた見本書なのですが、その中に「堀田」という文字が登場し、次のように解説しています。

「水田湿地の類にて田場一面に稲作を仕付けば、水腐して作毛生立ざる所ハ島田…の類に田の内を掘上げ畔を立て、堀上たる高ミに稲作を仕付、掘たる跡は水溜に成りて仕付成がたし、此等ハ検地の節田方一面に縄を請け、堀の分ハ反別を改め、高の内に立る、右の類常陸辺に多し」。

堀田というのは水田湿地の類で、田んぼ一面に稲作をやってしまうと腐ってしまって成り立たないので、島田、要するに堀田のところで、田の内を掘り上げて畔を立てて、掘り上げた高みに稲作をする。掘った後は水たまりになって、そこは植えることができない。

これはまさしく堀上田のことを説明しています。このように、江戸時代に既に行政見本書のようなものの中に描かれていて、多くのところがそういうものを模倣して全国で行っていました。意外とたくさんこの工法が展開されていました。今は全くといって良いくらいぐらいもうこの工法を見ることはできません。しかし逆に言うと、かつては広い範囲で見られたということです。

この工法は、完全な陸地化は困難で、どうしても水路ができてしまいます。そのために生産効率や生産面積、生産の安定性という面において難点がありました。一方で、その周辺での魚類や鳥類、植物などの多資源利用が可能になることが、先ほどお話ししたように長所としてあります。「半」の水田工法なのです。

この堀上田は、調べていくと二つの類型があるということが分かってきました。一つが水田開発型堀上田、もう一つが水田安定型堀上田です。要するに開発型と安定型があると覚えておいてほしいのです。水田開発型堀上田とは、低湿地や浅い沼沢地の底土を盛って土地をとにかく拡大しようとしたものです。自分の目の前に池や沼があって、どうしても田んぼが欲しいときに、それをどんどん埋め立てていく技術です。これは結構古く、中世からあったという説があります。歴史学者の方が中世説を取られています。確かにあったようです。次の水田安定型堀上田は、そのように広げていくのではなく、江戸時代などの技術は未熟なために、どんどん埋め立てていっても、またそこが沈降して低湿地化していき完成するのが難しかったため、既に広げてしまったところをもう一回きちんと安定させようという形で展開していったものです。この技術が展開されるのは江戸の中期以降です。

江戸の中期以降は、江戸時代で最も新田開発がなされました。幕府も各藩も行いました。商人も請け負って、田んぼをどんどん広げていきました。新田開発をしてしまったのだけれども、どうもうまくいかないときに、この水田安定型堀上田で補っていくという工法だったようです。

なぜ水田安定型などの堀上田が出てきたかという、これは今の話とつながってくるのですが、要するに江戸時代というのは米中心の社会で、米が収税体系の中心でした。年貢は米で収めたのは皆さんもご存じでしょう。その社会の価値基準が米でした。ですから、その米をたくさん作ろうとして、耕作面積を広げていこう、従来、人が入れなかったような低湿地にも進出しようとする意欲が湧いてきたのです。

江戸時代から米中心の社会があり、それはずっと近現代も引き継がれてきて、結局、米余りの状況になっていますが、ほんの少し前まで、皆さんが若い時代までは、もちろん戦争中にはお米が食べられなくて大変だったという話があるのですけれども、お米を作るといことは農家にとって中心的な作業でした。この時代も当然、米をどんどん作りたいということがあって、今まで人が入れなかったようなところ、本来、村立てすべきではないような不利な水辺の最前線へと次男、三男たちを開拓に向かわせます。そこで開拓をするのですが、うまくいかない。やはり水が多いのです。そのようなときに、この安定型を採用し、その結果、さまざまな産物が逆に生み出されていきました。こうして、江戸時代の中期あたりに、この堀上田あるいは潟文化、潟というものが栄えた時代があったようです。

そうは言うものの、やはり潟というのは不利な条件です。結局は海拔が低いために、頻繁に家が洪水に遭いました。あるいは恒常的に、日常的に、低湿地の中で足を取られて泥まみれになりながら、今では考えられないような農作業をしていたのです。やはりこういうことから早く脱却したいということで、ちょうど私が生まれたいわゆる高度経済成長期に、「半」から「全」へと転換する時代を迎えていきます。全国各地で全く同じベクトルの方向、「半」から「全」へとという方向での開発がなされていきます。

図表 21 は 1963 年の現在の氷見市の運動公園辺りの写真です。図表 22 は、それから 10 年後のちょうど工事をしているときの写真です。潟がなくなった写真は山ほど残っていますが、工事中の写真は珍しいです。何年かに 1 回しか撮らない空中写真で工事風景を撮っているのです。先ほど紹介した水辺のラビリンスがあったところが埋め立てられていきます。これは「半」から「全」へと転換する時代の一つの象徴的な工事風景だと思います。

6. 邑知潟

さて、これから他の県に移ってみたいと思います。まずは西側のお隣の石川県のお話です。邑知潟というのは皆さんご存じですね。邑知潟干拓地というのは私も小学校か何かの授業で習った記憶があります。干拓する前は、先ほどの十二潟と同じような、「ウネタ」や「ムネタ」と呼ばれるものが広がっています。地理的にも近いので文化的にも交流はあったと思います。射水の田舟（タズル）と似た「田づり」という舟も使われています。同じような文化、低湿地のつらい生活があったのです。

国営邑知潟干拓建設事業「水土の礎」のホームページから援用すると、「うね田は、潟縁開発の最も一般的な手法で『むね田』とも呼ばれていました。潟縁の浅瀬で畝を造るように溝を掘り、掘った土を盛り上げた畝状の埋立地を水田とするもので、畝幅を少しづつ拡

げて耕地を拡大し、掘り下げた溝はかんがい排水のほか耕作や収穫などに用いる小舟の小運河として利用されていました」ということです。

もちろんこれも、稲作という面から見れば、ものすごくネガティブな工法だったと思います。そのために国営で邑知潟干拓事業が進められていきます。昭和 23 年から結構長い期間をかけて、最終的に事業完了したのは 20 年後の昭和 43 年です。人も寄せ付けない、最深 24m にも及ぶ「ヘドロ」と称する軟弱地盤との戦いであったともいわれています。

7. 旧・福野潟

もう一つ、この邑知潟の北に福野潟があります。これは江戸時代に消えているので、旧福野潟と呼んだ方がいいと思います。そこにもウネダというものがありました。江戸時代まで福野潟があったのですが、江戸時代から既に開発がなされています。志賀原発のある石川県志賀町の南の方です。福野というところの裏側に潟湖がありました。砂丘があって、いつの間にか湖ができて、それがだんだん陸地化して田んぼになりました。図表 29 のような形です。本当に迷宮の形をしていると思います。江戸時代の文書にもその形が残っています。

ここは 18 世紀までは潟湖があったのですが、18 世紀の末ぐらいから開拓が進んで、明治に入ると今のような田んぼになっています。1970 年代まで残っていたのが、もう 1980 年代には消えています。水田化されて、川辺のところは完全にきれいな水田になっています。しかし、一番深いところはなかなか開拓が進みませんでした。2010 年にもそこは結局うまくいきませんでした。そして現在を見ると、跡地がもう荒地になっています。結局、「半」から「全」へと向かおうとしたのですが、失敗した例です。これは工法的に失敗したというよりも、社会状況が大きく変わったためです。かつては米というものがとても重要な経済的産物だったのが、米余りという時代を迎えて、逆に減反が行われるようになりました。要するに時代状況が変わったのです。

さらに、ここを担う農家の人たちも高齢化が進みます。少子化が進みます。その結果、こういうものを維持していく人がいなくなっていきました。「全」に向かっていく目標が米という一元的な単一のものだったため、その目標が崩れたら「全」も失敗してしまいました。私は非常に残念だと思います。ノスタルジックな気持ちもありますが、この空間が今、残っていて、菜の花でも植えておいたら、春には一大観光スポットになって、多くの人たちが今でも集まっていたと思います。

これは絵空事ではありません。中国の江蘇省興化にある塚田という堀上田は、2014 年に世界農業遺産になっています。今や菜の花を植えて観光地として栄えているのです。これは残そうとして残ったというより、一周遅れのトップランナーで残ってしまい、いつの間にか世界農業遺産になってしまったという話でしかないのですが、こういうものをあえて残していれば、志賀町の福野潟も大きな観光地になった可能性があります。ただ、これと言うは易しで、残せばいいという話ではなく、手を入れなければあつという間に荒れます。われわれが働きかけて、鋤簾（じょれん）で汲み上げて、毎年毎年きちんと作業をしないと、あつという間に荒れてしまうのです。ですから、現在の社会状況を見ると、やはり水辺のラビリンスを守り続けるというのはそれほど簡単なことではなかったと言えるかと思えます。

8. 新潟市西蒲区

さて、今度は東隣の新潟です。新潟は「潟」と付くように潟の県です。新潟平野、米どころと呼ばれているところは、第2次世界大戦後に潟を陸地化、乾田化してできました。今や日本最大の水田地帯と呼ばれていますが、元々は潟だったのです。特に西蒲原郡と呼ばれていた、今の新潟市の西蒲区の一帯です。図表 40 は西蒲区の旧巻町というところですが、やはりたくさんありました。迷路のようです。自分の田んぼに舟で行かなければいけないのに、私だったら辿り着けません。一筋間違えたと行けません。もちろん地元の人たちは長年いるので、自分の田んぼがどこにあって、どの水路を通れば行けると分かると思いますが、こういうものが今残っていれば、とても楽しい、子どもたちが喜ぶ空間になっていたと思うのですが、残念なことに美田化されて、日本最大の穀倉地帯に変わっていったのです。

9. 岐阜県海津市

今度は太平洋側のお話をします。木曾川流域に輪中と呼ばれる地帯があります。長良川、揖斐川、木曾川の木曾三川が岐阜県の下流部で交わる場所は低湿地帯です。川がどんどん高くなりますから、川の縁をずっと高くしていき、輪中と呼ばれるものを造ります。その中が低湿地になるので、仕方がないのでどんどん掘り込んでいきます。上から見るとほとんどくし状になっています。輪中の半分は水、半分は田んぼという状況です。

10. 埼玉県杉戸町

次は埼玉県の旧安戸沼・大島新田と呼ばれているところです。図表 46 は 1948 年の写真です。これも堀上田マニアの中では意外と人気がある堀上田です。非常に美しいです。私が好きなのの一つです。芭蕉の葉っぱの葉脈のように見えませんか。丸い葉っぱ状のところ、かつて安戸沼という沼だったのです。それを江戸時代に開拓し、大島新田というものになっていきます。この辺りの本村のところから次男三男が出て、この周囲にあるのが大島新田の集落です。この中は集落の人たちが所有していたのです。

18 世紀の初頭に開拓されました。『大島新田開拓之記』には、「地盤高低深淺ヲ稽查シ数間毎ニ堀ト墾田トヲ交互ニ置キ堀底ヲ深ヒ上ゲテ両側ニ撒土シ而テ耕地ヲ作ル」という、いわゆる堀上田の作り方の説明があります。

ここが面白いのは、実は堀つぶれがものすごく良い漁場になっていたことです。釣り漁や網漁など、さまざまな魚捕りの方法がありました。自宅で消費するフナなどは焼いたり甘露煮にしたりして保存しました。さらに、年の暮れに正月料理として寒ブナが用いられるため、良い副収入になりました。魚を捕ることは米と同じくらいの現金収入になった家があるほどでした。さらに、「沼の子どもは親から小遣いはもらわない」とまでいわれるほどでした。要するに子どもたちも魚を捕って、自分たちで売って稼いでいた、そのぐらい豊かな湖だったのです。

さらに、重要なのは、単に魚が自然と湧いてきたのではなく、人々が手をかけていることです。大正期には養魚し、自分たちで再生産しました。卵から孵化させたものを放流していきました。それを共同で、新田の所有者あるいは耕作者たちが一緒に組合をつくって

行いました。自由に勝手気ままにやっていたのではなく、社会的な漁場の規制を受けていました。沼周りがいわゆるコモنز化していたのです。コモنزというのは、地域コミュニティや複数の主体によって共同で使用され管理される資源やその仕組みです。今日のコーディネーターの秋道先生はこの研究の日本の第一人者です。

人々の結び付きというのが強くなければできないのです。低湿地の中で、非常につらい中で一緒に生活している人たちというのは、紐帯（ちゅうたい）、簡単な言葉で言えば絆、社会的な連携が非常に強かったのが、こうしたことをやることにより、さらに強化され、コモنزが強化されていきます。

今日は私は触れませんが、低湿地の場面を見ていくと、一緒に共同で何かをやっていく社会システムが結構多く見られます。低湿地という困難な状況に対応するのは、工学的な方法で言えば先ほど言った堀上田、農学的方法で言えば低湿地に対応するような稲作品種、そして社会学的方法がこうした社会的なコモنزと呼ばれている仕組みです。これらを総動員して低湿地に対応していた、そのような時代があったのです。しかし現在の空中写真を見ると、葉っぱが枯れてしまって、真ん中に穴が空いているような、調整池を造らなければいけないような状況になっています。

11. 茨城県牛久沼

私のフィールドである茨城県龍ケ崎市の牛久沼でも、同じようにカキアゲタ、ウキタがなされてきます。私は大学が筑波大学だったので、牛久市の非常勤の市史編さんの事業もしていたことがあり、これに気付いたときはワクワク、ドキドキしました。ここでフィールドワークもしたのですが、城中・新地という、新地という名前が付く新田開発の集落があり、その間にびっしりとカキアゲタがあります。陸に付いているのがカキアゲタで、水中にあるものをウキタと呼んでいるのですが、これらでびっしりと埋め尽くされています。ここの話を聞くと、稲作と漁労と狩猟と採集を組み合わせる生活がなされていました。これも残っていたら、水郷地帯の非常に良い景観だと思うのですが、今はもう「きれいな」乾田化された田んぼになっています。

この水路は魚が非常に豊富な場所だったのです。稲作は図表 54 のような形でやりました。図表 55 はオダ漁という漁です。これも全国で行われているようです。雑木を夏場に固めてどんと、自分の家のウキタの脇に置いておきます。そこに置いておくと、冬場の寒いときに魚たちが、寒くて寒くて仕方がなくて雑木の中にわっと入るのです。竹の簀（す）で周りを取り囲んで魚が出ないようにしておいて、それから雑木を全部上に上げていくと、当然、簀の中には魚がわんさかいるのです。水路は生産性が非常に高いのです。もちろん人間が養殖しているわけではありません。入り組んで、そして逆に言うと人間が不完全なおかげで、さまざまな水草なども生えているので、魚にとっては最高の場所になるのです。平べったい湖の岸よりも入り組んでいる方が魚にとってはいいのです。あえて作っているというよりも、自然とそのような形になっている天然の養魚池ということです。

日本の農村はさまざまな資源を使っていますが、全ての資源が使われていくわけではありません。例えば平野の農村では稲や畑作、養蚕などを使っていて、山では山の産物を使っています。水辺は、またそういうものとは違った、マコモや泥土などを資源として使っていくという状況でした。

野鳥の話にも触れておきたいと思います。茨城県の牛久沼では、ナガシモチといって、縄に取りもちを付けて流し、カモをからめ捕るといふ猟が行われていました。コガモやオナガガモを捕っていたのですが、これは実は千葉県の手賀沼というところから導入した技術だといわれています。

12. 千葉県手賀沼

この手賀沼もかつての低湿地で、今はすごくきれいな田んぼになっていますが、かつては沼でした。手賀沼は日本で二十数年間にわたって最も汚い、水質汚染が進んだ沼として有名でした。それは昭和 40 年代からで、それ以前は非常にきれいでした。1948 年、埋め立てが進む 5 年前まではカモ漁が行われていました。単なるカモ猟ではなく、ものすごく大規模なカモ猟で、カモの一大産地でした。今、われわれはめったにカモを食べることができませんが、ほんの数十年前までは、カモやガンなどの水辺の鳥が大量に食べられていました。手賀沼は江戸、東京への最大の供給地で、ここでの捕れ高で江戸、東京の相場が変わるといわれるぐらいでした。ナガシモチという手法と、ハリキリアミという技法で捕っていました。手賀沼ではハクチョウやガンなど、今は食べられない鳥が捕られていました。現地で食べるだけではなく、江戸、東京に運ばれていました。

布瀬というカモ猟の中心の村の神社を再建したときの江戸時代の石碑に、寄付者の名前が書いてあります。「金百両 江戸安鎮町東国屋伊兵衛」「金五十両 同町 鯉屋七兵衛」などあり、東国屋伊兵衛は百両寄付しているのです。江戸の商人がなぜこんな田舎に寄付しているかという、実はこの人は有名な鳥問屋なのです。東国屋伊兵衛は、鞆町東伊（さやちょうのとうい）として、『本朝侠客伝』という本にも出てきます。幡随院長兵衛など、有名な江戸時代の侠客を集めた本に列せられるぐらい、豪胆でちょっとアウトローっぽい人物が鳥商売をしていたのです。

江戸のどこでしていたかという日本橋です。日本橋は魚市で有名で、気付く人は少ないのですが、『江戸名所図会 一』の「日本橋魚市」で鳥を持っている人が描かれています。あとは全部魚で、アンコウのようなものもありますが、拡大すると、鳥を持っているのです。江戸時代には幕府が鳥の流通を管理して、日本橋以外では売ってはならないという統制をするのです。その統制、管理する中で、魚市で鳥が売られていました。

「江戸図屏風」という、国立歴史民俗博物館所蔵の国宝にも日本橋が描かれています。この安鎮町辺りのところに実は鳥を持っている武士がいます。日本橋は鳥が非常に集まる場所で、それは単に市場として形成されたのではなく、幕府がここで売れと指定したからで、しかも 10 軒など軒数が制限されていました。

その制限をしたのが徳川綱吉や徳川吉宗で、この 2 人がすごいことをやっていくのですが、そのお話は今日はできないので、宣伝になりますが、私、2 年前ぐらい前に『鷹將軍と鶴の味噌汁』という本を出しました。よろしければこの中に詳しく書いてありますので、ご覧いただければと思います。

さて、以上の潟＝低湿地で利用できる資源は目に見える、触ることのできる有用な資源です。最後に日本海に話を戻して、もう一つ重要な資源の話をしたと思います。

13. 福井県三方五湖

最後にご紹介するのが福井県三方五湖です。三方五湖もここからそれほど遠くないので、行かれた方がいらっしゃるかもしれません。久々子湖、日向湖、菅湖、水月湖、三方湖という五つの湖があります。日向湖は塩水湖で海とつながっています。何か奇妙な形をしているのは、江戸時代に地震があり、それによって水のたまり方が変わっていったためです。久々子湖の一带は潟湖です。一方で、内陸からせき止められたためにできた湖もあります。今日お話しするのは、潟湖の奥にある三方湖というところです。

この一带の漁業は面白いのです。よくあるといえばあるのですが、どこでも誰でも魚を捕っていいというものではありません。今でもそうです。鳥浜という集落に住んでいる人でなければ漁業をしてはいけません。鳥浜漁協というものが今もあって、それは鳥浜に住んでいる人しか入れません。それ以外の集落に住む人は、目の前に自分の池があっても漁をすることができないという不思議なところがあります。これには歴史的な経緯があります。

この三方湖の中に小さな島状のところが 있습니다。これはかつて島でしたが今は埋め立てられています。これは田井島というところです。間のところは田井島新田といって、新しくできたきれいな田んぼになっています。田井島新田は島ノ内とも呼びます。

これは、江戸時代から先ほど言った堀上田という形ですずっと開拓されていて、文書が残っています。1876年（明治9年）にはもう水路までありました。1948年の空中写真を見ると、それが残っています。1876年の文書の図と1948年の空中写真を重ねるとぴったりです。1948年までは江戸時代の堀上田が残っていたということです。

さらに1963年、私が生まれた年、今からちょうど60年前も、まだ同じように残っていたのです。ところがそれから5年後の1968年には乾田化されていきます。1975年にはきれいな田んぼになってきます。1970年代になると乾田化が進みます。さらに乾田化したのが2000年代で、畝をなくしてもっと大規模な田んぼになってきます。今は美田になっていますが、昔は湖の低湿地帯があったのです。

1982年の大雨のときは、乾田化しているにもかかわらず、やはり水浸しになりました。ですから、堀上田のときはもっとすごい状況になるのです。この状況はネガティブといえどネガティブなのですが、ここに住んでいる方はこのような語りをします。

「ドブタは、櫛みたいになってるんです。ドブ川の方はやっぱり舟が通るんで、整備をする。鋤簾（かき上げるもの）持って行って、みんな上げとりました。泥を上げる。そうすると、流れた泥も還元されますし。あれやると、稲がようできましたね。ほとんど無肥料で作れるぐらいでした。田植え後とか、6月とかその頃、雨降りますと、植えた田んぼにみんな水がどぼっとつきますから、そうすると産卵のためのフナがたくさん上がってきて、雨が降ると、みんなタモ持って、フナ捕りが仕事でした。それはおもしろかったですわ。そんなもの、10キロや20キロも見とる間に捕れましたね。それがいったんど一っと水がすきまっしゃろ。それがどんどんどんどんその水が引いてくると、魚が田んぼの上でべたべたべたべたしとるんですわ。それを拾えばいいわけですから。フナ拾いになるわけ。フナ拾いに行くわけですわ。5月の下旬から6月。あそこの田んぼへもここの田んぼへも大勢の者が入るもんですから、稲も一緒に踏むんです。みんな、それは自分の田んぼでなしに、どこでも目的が魚拾いですから、田立（地名、山の方）の人もみんな下がつて来るわけです。よその集落の人もみんな来るわけ。こういう田んぼは、フナが多いわけです。昔は三方湖もフナであふれておったですからね。フナもコイも。大きさこのぐらい。かな

り大きいもんですよ。産卵のために上ってくるフナ。そして、6月になると大ブナって、こんな大きいのが。それは6月になっても、大ブナは刺身にして食べられました。大ブナのこんな大きいになると、美味しかったですよ。昔はそれが普通でしたから、もう百姓も諦めとりましたな」。自分の田んぼにいろいろな人が入ってくるのを諦めていたのですね。「その頃、そういうことに文句をつける百姓って、あまりおらんだね。ほんとにバシャバシャやります。気にしとるけはなかったです、魚捕りに夢中で。夕方から朝も白々明けにね。夜中に松明灯してやっと思った人もありますけど。松のジンを焚いて。ライト代わりにして。タモ持っとるんですわ」。これが1925年生まれの子の語りでした。

では、この人一人の思い出かという、違うのです。別の集落のまた別の1931年生まれの女性がこう語りました。

「ここはみんな田んぼだったんだからね。だからそこへな、ほら、5月になると雨が降るわね。そうするとフナの産卵期やね。そうすると、ヒラブナといってね、タイみたいな。それが、今のこんなきっちりとした岸じゃないから、ほれ、マコモだとか。そういうものを土手だから。それで水が増すと、そこへ子を産みに来る。そうすると田んぼの中へじょろじょろじょろじょろじょろじょろ。そうすると夜になるとな、このぐらいなかごの底が抜けたようなな。そしてちゅっと張って。張ってそのフナを捕って。まあそのフナも面白くてな」。これは何を言っているかという、皆さん、かごは分かりますね。竹かごの底を抜いていると思ってください。いわゆる伏せかご漁という、抜けている底から手を入れて、中にある魚を捕る漁のことを説明しているのです。

「面白かったね。かごで、底が抜けてる。魚がいたら伏せて捕る。それでな、増水するとフナというのはそんなに水がなくても、もうどうしてでも上がるがね。べちゃべちゃべちゃべちゃ上がって。そうすると水が引くと、足つぼといって足の跡がある。その中にいる。そんなのだとそんな、昼だったらかごまでしないでも手で。へラブナから、それから、ほれ、ナマズも入ってたし、コイもたまには。で、今でも田んぼに、大きなコイががらがらして上がる時があるんですよ。川に。そうするとわたしらでもつかめそうなのが、ときあるんですけども。そんな夢今でも見ますもん。うん。それだけこの湖は魚やいろいろなものの宝庫だった。それでそんなの食べて、小さいからそのフナを骨ごと炊くんです。もう、骨ごと炊いてというか、フナマメといって、フナを大豆とで、もう骨がほとんど柔らかくなったときに豆と一緒にして炊くんです。そうするとみんなもうぼろぼろな、骨がぼろぼろなんです。それをきばって食べたおかげでね。虫歯にならなかったのかね。主人は80歳になってもね。全部自分の歯。歯はやっぱカルシウムが、何と云うか、胎児のときから母が食べる薬、子供のときからそういうものを常備食にして食べてたから、やっぱ良かったんじゃないかと思うの」。

面白い、そして夢にまで見るというものだったのです。魚といっても、それを食べるという経済的な活動ではあるのですが、それ以上に楽しんでいました。このドブタでの魚捕りというのは、経済活動であり、かつ楽しみ、遊びだったのです。完全な水田にはなり切れない、水界と陸界の境が曖昧な状況である不完全な「半」の水田が、経済活動・労働とも遊びとも峻別しがたい、「これは仕事なの、遊びなの?」「いや、仕事だけど楽しんでるんだよ」というようなものをつくり上げていったのです。それが地域の人に共有されてきました。

そのような活動が高度経済成長期を経て失われました。「半」から「全」へという流れです。得たものはもちろん大きいです。美田となって楽になりました。水害を毎日憂慮する必要もなくなりました。しかし、得たものは大きいけれども、失われたものもまた大きいということです。もちろん、このように苦渋に満ちていて、それを解消したいという歴史がありました。

14. 最後に

低湿地の生活は、水に悩まされる苦難に満ちていました。自然の脅威に手をこまねいていた人たちも、徐々に徐々に、江戸時代から力を発揮して、水面を陸地化していこうとします。しかし、その技術というのは限界がありました。技術が突破したのは第2次世界大戦後で、意外と新しいのです。それまでは、人間のぎりぎりの力によって「半」の水田、いわゆる堀上田にしていくということをやっていました。これは結局のところ、自然を完全に支配することはできないので、水の害や水の脅威に常にさらされていました。しかし一方で多様な資源を得ることができ、資源を得る楽しみを享受することができたのです。ただし、この不完全な「半」の状況は、日本全国で「改善」されます。その時代状況の中では仕方がなかった一つの選択肢ではありますが、土地改良事業という、自然を破壊するけれども生産性を高めていくという二面性を持った事業を行っていきます。それによって、結局、日本海側の特徴的な潟は水害から逃れることができている。しかしそこで営まれていた活動はなくなっていきます。

こうした「半」の状況を、単純なノスタルジアから嘆くことは不適當です。「半」の水田から「全」の水田への脱却というのは、そこに住んでいる人たちにとっては念願だったのです。そこに住んでいる人たちがどう考えたか、私はこれが一番大事だと思います。われわれのようによそから来て、「ここは自然がたくさん残っていたから、残すべきだった」と言うのは簡単ですが、そこで生活している人からは、「いやいや、ここでの生活はつらかったのだよ」という言葉がやはりたくさん聞かれます。ただ、「つらかった」と言いながら、先ほどのように「でも楽しかったな」ということを語るのです。まさにこのような「半」の語りということが重要なのです。

現在、全国の潟を埋め立てた跡地が荒廃しています。あるいは、田んぼにしようと思ったのだけでも、田んぼにできなくて果樹園など別のものにしてみたり、あるいはもう最初から田んぼにできないと分かって調整池や運動公園にしてみたりしたところがあります。要するに、そのまま放っておけばよかったようなものをあえて埋め立ててしまったというところもあります。そのようなところを見ていくと、やはり一つの「全」への流れ、単一目的を立てた「半」から「全」への転換はかなり問題があったのだろうということも、もう一方で分かります。

これは皆さんもそうだと思いますが、「半」というのは落ち着かないのです。中途半端、不完全。人を責めるときにも、「この半端者」「半人前」と言って責めてしまいます。身の回りが完全であることが普通になっています。そして完全というものが偏重されていきます。安全神話もそうです。全てのものが完全でなければいけない。そうすると、身の回りに起こる偶然やリスク、不確実性を受け止めていくこと、不完全な在り方を恩恵と考えたり、楽しんだりすることは今の私たちにとってはとても困難なことです。

さらに、その「半」という状況を過剰な美しさで美化する必要もないし、してはなりません。単純に言えば、堀上田のような技術は、それを乗り越える技術がなかったために仕方なく使われたので、完全な乾田技術があれば「半」などにせず、江戸時代から本当に「全」に向かっていたはずなのです。それは偶然でしかなかったのです。しかし、その偶然が、先ほどから何度も言っている楽しみや喜びというものも生んでいました。このような在り方から、われわれは「半」から「全」に移ってきた時代を経て、教訓として学べるものが多々あると思います。

日本海側のこの「潟」というものの歴史の変遷は、これからの自然と人間の付き合い方、古くて新しい心性を私たちに教えてくれるものだと思います。今日のテーマである「潟」という空間は、自然環境の問題だけではなく、これからの時代を生きる、皆さんの人生を考える上でも大きな教訓を与えてくれると考えています。

パネルディスカッション

「潟と日本人—日本海の生態史—」

コーディネーター：秋道 智彌（山梨県立富士山世界遺産センター 所長、
日本海学推進機構 会長）

パネリスト：菅 豊（東京大学 東洋文化研究所 教授）
高橋 輝男（公益財団法人富山市ファミリーパーク公社
企画事業課主査）
中野 知幸（羽咋市教育委員会文化財課
羽咋市歴史民俗資料館 学芸員）

（秋道） 皆さん、こんにちは。秋道です。
1年ぶりです。今年度はウクライナ侵攻とコロナ禍がまだ続いています、日本海といってもプーチンや北朝鮮の話はしないのでよろしくお付き合いください。最初は菅さんの基調講演に続いて、お二方の発表があるので、全体でどんな感じかということをお話を1~2分でお話しします。

日本海沿岸には潟が多いです。基調講演でも紹介がありました。富山では放生津潟と十二町潟があります。青森県の十三湖、埋め立てられた八郎潟、また、新潟県にもたくさんの池や沼や潟があります。富山県と石川県、それからずっと山陰地方を回って九州まで潟がたくさんあります。東シナ海の甌島諸島の上甌島には甌四湖があります。これは南流する五島列島が砂を運んできた結果できたものです。甌四湖の南側には陸繋島が見られます。いわゆるトンボリですね。

本州一番北の十三湖は津軽半島の岩木川下流部にあり、ここは北海道との交流で栄えた



ところ。石川県の加賀三湖（柴山潟、今江潟、木場潟）もほとんど埋められてしまいました。昔は梯川から南の大聖寺川まで通じていたのです。川を上って田んぼの水路を通過して、大聖寺川まで行くことができました。

京都府の丹後半島の西にある久美浜湾では、まだ、なまこ漁をしていますし、江戸時代は北前船の寄港地でもありました。

放生津潟は基調講演でお話にあったとおりです。

博多湾には江戸時代まで潟がありましたが、今は埋め立ててほとんど様相が変わっています。江戸時代は、朝鮮半島から江戸幕府への朝鮮通信使の一行が博多津に着いたときに、鴻臚館（こうろかん）に泊まりました。ここがゲストハウスだったのです。ここから玄界灘を東へ行き、関門海峡を通過して瀬戸内海を経由して大坂から江戸に向かいました。だから潟は港という意味合いでした。後で中野さんの話にも出てくるとは思いますが、そういったことを皆さんもご記憶ください。

潟は菅さんの話のように「半」で、海と陸の境界領域にあります。その意味では、両方の影響を受ける、あるいは両方から被害を受けたり恩恵を受けたりするような場が潟です。そこで人と潟のさまざまな交流が歴史的に行われてきました。

お二人のコメントでは、まず高橋さんからは、陸上の視点ではなく、潟を大陸との関係で考えて、日本海を越えて渡り鳥や、昆虫あるいは渡り鳥と一緒に鳥インフルエンザウイルスが飛んで来る。そういった話も含めて空中戦の話を披露いただいて、潟の魅力あるいは問題点をご指摘いただきます。その後、中野さんには、潟は単独で存在するのではないということで、潟と潟をつなぐ人間活動の歴史について、とくに邑知潟を中心とした古代における意義を考えてみたいということです。それを踏まえて、もう一度、日本海の潟の歴史、私は生態史と呼んでいますが、それを皆さんとともに考えていきたいと思っています。よろしくお付き合いください。

早速ですが、20分程度の話題の提供をお二方からお願いします。最初は高橋さんからお願いします。高橋さんはファミリーパークにお勤めで、園長は山本さんですね。山本先生はよく存じ上げています。その若手のホープです。よろしくお願いします。

「日本海の潟と鳥」

高橋 輝男（公益財団法人富山市ファミリーパーク公社 企画事業課主査）

私は今、若手とご紹介いただきましたが、就職して大体四半世紀がたっています。キャリアの半分を飼育委員として勤め、残りの半分は園内の自然観察のガイドの仕事を主にやってきました。現在は事務職です。

1. 渡り鳥について

まず日本にどれぐらい鳥の種類がいるかというと、六百数十種類といわれています。そのうち四百数十種類、約70%が渡り鳥です。日本の外からやって来る、あるいは日本の外に出て行く生態を持っている鳥です。

秋の渡り、冬鳥が日本にやって来る時の渡りのコースは、サハリンの方から北海道を通過して本州に入って来る、千島列島から入って来る、朝鮮半島から北九州に入って来て日

本海側に広がっていくというものが多いですが、中には日本海を直接突っ切ってやって来る鳥もいます。ただ、ほとんどの場合は適切な生息場所を自分で見つけたら、そこで2~3日滞在して、少し体力を回復して、また数百キロ飛んで、いいところで休むということを繰り返しながら飛びます。この飛んでいくルートと途中で中継して休んでいくところ、最終的な到着地・目的地をまとめてフライウェイという言い方をします。飛ぶルートです。フライトウェイというのが今日の一つのキーワードになるので、覚えていただきたいと思えます。

日本海側はとて湖沼が多いです。代表的な水鳥の渡来地は、秋田県の八郎潟、新潟県の福島潟、佐潟、鳥屋野潟、大潟、石川県の河北潟や片野鴨池、福井県の北潟湖や三方湖・水月湖、島根県の中海・宍道湖があります。こういったところを中継しながら飛んでいきます。ハクチョウやガンの渡来する最南端が島根県ぐらいです。この湖沼を飛石のようにポンポンと経由しながら鳥は利用して旅をするのです。ですので、飛石が1個欠けてしまったらフライウェイ全体が変わってしまうという危険性があります。ですので、それぞれの湖沼、潟を守っていくという視点と、この湖沼同士のネットワークをどうやって守っていくかという両方の視点が必要になってきます。

次に、ガン、カモ、ハクチョウといういわゆる水鳥の仲間が、どの県でどれくらいの数越冬しているかが、毎年1月の成人式あたりに全国で一斉に調査されます。ガン、カモ、ハクチョウの2021年の推定越冬数は、秋田県が1万羽です。北過ぎるので、秋田県辺りで越冬するものはあまりいません。山形県が3万1000羽、新潟県が5万6000羽、富山県が1万1000羽、石川県が5万6000羽、福井県が2万4000羽、島根県が5万4000羽です。

富山県が群を抜いて少ないです。これはひとえに大きな湖沼がないからなのです。大きな湖はありますが、富山県で湖というとどうしてもダム湖になってしまいます。平野部に開けた大きな湖がないというのが、富山県に立ち寄る鳥、また富山県で越冬する鳥が少ないという原因の一つになっています。

2. ラムサール条約について

さて、ラムサール条約という話をよく聞きます。富山県でも弥陀ヶ原湿地が登録されています。このラムサール条約は、正式には「特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地に関する条約」という名称なので、亜高山帯で鳥がいない湿地が登録されるのは実はイレギュラーで、とてもまれな例です。本来は水鳥がたくさんいるところが登録されています。

ちなみにラムサールはどこか分かりますか。イランです。イランの一番北側にカスピ海があります。カスピ海が一番南側にあるリゾート地の名前がラムサールです。正式にはラムサールというそうです。ラムサールには実は湖はありません。湿地もありません。条約が締結されたという都市なだけです。ですので、ラムサール湿地という言い方は実は誤解を招くのでちょっと難しいかもしれません。

このラムサール条約は、世界で2400カ所以上の湿地が登録されており、日本でも53カ所以上の湿地が登録されています。これはどの湿地でも手を挙げれば登録してくれるかというところではなく、厳しい審査基準がいろいろあります。代表的なものに、2万羽基準と1%基準というものがあります。2万羽基準は、種は交ざっていてもいいのですが、ある一定の時期に2万羽以上の水鳥が利用する湿地という基準です。1%基準は、ある地域の特

定の希少種の全体個体数の1%が利用している、例えば世界に1万羽しかいない鳥だったら100羽以上が生息・利用する湿地という基準です。この二つのどちらかを満たしているものがラムサール湿地に登録されます。

富山県は全体を合わせても1万1000羽なので、2万羽基準に届きません。富山県全体が一つの湖沼だとしてもラムサール条約に登録するのは難しいということになりますが、富山県にも実は大きな湖沼はありました。これはクイズのつもりだったのですが、正解が何度も出ているから省きます。現在、富山新港になっています。こちらは1960年ぐらいまでは放生津潟と呼ばれ、最後の方では越の潟という呼ばれ方もしていました。海に面した湿地です。実はこの越の潟（放生津潟）は埋め立て直前には3万羽前後の鳥が毎年利用していました。もしそのままの姿だったとしたら恐らくラムサール条約には問題なく登録されていた規模の湿地だったと思われそうですが、1970年以降の開発によって近代的な港湾に生まれ変わり、日本海側屈指の工業圏を支える重要な港として位置付けられています。

海王丸もいますし、新湊大橋もあります。そして美しい湾クラブという看板も立っている県の観光PRなどにもよく画像が使われている憩いの場になっています。ですので、この形になって良かった部分も当然ありますし、それによって失ってしまった部分というのめかなりあるわけです。何を残して何をつくるかというトレードオフというのは常に悩ましい問題として関わってくるということです。

さて、先ほどフライウェイという話をしましたが、フライウェイは日本国内だけの話ではありません。海外とのつながりもフライウェイの一つです。渡り鳥は国境を越えるからです。国境を越えて日本に渡って来る鳥たちを守る国際条約にはどういったものがあるかを説明します。

3. 渡り鳥条約について

日本は四つの国と渡り鳥条約というものを締結しています。この渡り鳥は捕ってはいけない、渡り鳥の加工品を販売してはいけないという取り決めです。日米渡り鳥条約、日中渡り鳥条約、日露渡り鳥条約、日豪渡り鳥条約があります。アメリカ、中国、ロシア、オーストラリアの4カ国とだけしか条約を結んでいません。ただ、実は4カ国も条約を結んでいるのは日本ぐらいなのです。この話は後ほど種明かしをしますが、まず朝鮮半島が抜けているのではないかということについて説明します。

日本と韓国は、渡り鳥条約はありませんが、日韓環境保護協力合同委員会というものを設置しており、そちらの中で、渡り鳥条約に該当する内容のものについて協力してお互いに情報提供をしたり、統一した保護の基準を作ったりしていくということで、毎年1回ずつ日本と韓国交互に会合を開いています。いましてと言った方がいいのですが。

実はこれが2018年を最後に会合が1回も開かれていません。両国関係の悪化のためですが、具体的に言うとレーダー照射事件の直後からなくなっています。

そして今まさに鳥インフルエンザが九州で猛威を振るっています。ツルが何千羽も死んだというニュースは皆さんご存じかと思います。朝鮮半島からマナヅル、ナベヅルは渡って来ます。一万数千羽で、そのうち1300羽（10%）ぐらいの個体が日本で死んでいるのです。あまりに数が死んでいるので、その死体を恐れて朝鮮半島に帰って行って、朝鮮半島では今、数が激増しているそうなのです。それがどこから帰ってきた鳥なのか、ある

いは日本で今どういう状況なのかを日本と韓国で相談して情報共有するホットラインが全くない状況なのです。恐らく現場レベルではきちんと交流はしていると思うのですが、必ずそうしましょうという取り決めがない状態で今動いています。これが国境なく動いている渡り鳥の保護にとってはとても悩ましい問題で、こういった政治的な不安定さが野生動物の保護に影響を与えることはあってはならないというか、そこは切り離して考えていただきたいという思いでいます。

さて、今の韓国と合わせて5カ国と日本は渡り鳥協定を結んでいるのですが、日本以外の国はどのようにしているのかです。実は多国間条約に加盟しているので、いちいち一つ一つの国と条約を結ばなくてもいい状況になっているのです。ボン条約（移動性の野生動物種の保護に関する条約）に124カ国、ほとんどの先進国が加盟しています。ほとんど聞いたことがありませんよね。なぜかというと日本は加盟していないからなのです。

ちなみに今日は会場は若い方が多いので説明すると、昔、西ドイツという国があり、そちらの首都がボンなのです。なぜ日本はボン条約に加わらなかったのか。移動性の野生動物種というところがくせ者で、これは陸上の動物も水中の動物も含まれます。陸上で言うとバイソンやトナカイも入ります。海の中で言うとクジラ、イルカ、ウミガメも入ってくるのです。だから日本はこの規制にはどうしても賛成できないということで、ボン条約の加盟を保留しているという状況が続いています。世界的には先進国としては非常に珍しい立ち位置を取っているのが日本の渡り鳥行政ということです。

でもラムサール条約があるではないか、それで一個一個の湿地を守っていけばいいのではないかと思うかもしれませんが、しかし、実はラムサール条約には保全に関する義務はないのです。「ラムサール条約に登録された、やった、これで保全がされる」ということにはならないのです。努力義務が書いてあるだけです。

例えば、ワシントン条約という希少動物の商取引に関する条約では、日本国内でその条約を守らせるための法律が整備されています。種の保存法といいます。ですので、ワシントン条約を破ったことをすると種の保存法違反で逮捕されるのですが、ラムサール条約では国内法が設定されていません。通常の鳥獣保護法や国立公園法のようなもので守られているだけなので、ラムサール条約に登録されている湖とそうではない湖は保護に関しては差がないのです。

もっと言うと、ラムサール条約の湖でカモが休んでいて、夜になったら田んぼもしくは河原に行って餌を食べるとします。その田んぼもしくは河原が可猟区であれば、そのカモを撃っても食べても合法的なことなのでオーケーになります。そんな不思議な、「全」と「半」でもないのですけれども、なかなか割り切れない部分が多くある保護行政になっています。

4. 潟・湿地が提供する生態系サービス

そんな日本列島なのですが、「生物多様性ホットスポット」というものに生物地理学会で指定されています。生物多様性ホットスポットとは、1500種以上の固有維管束植物が生息している、要するにシダ植物以上の高等植物で固有のものがものすごく多いのだけれども、原生の生態系の7割以上が改変されている、人の手が入っている、もしくは破壊されている地域です。日本以外はほとんど熱帯雨林地方で、日本は温帯としては例外的にこれに指定されています。豊かな生物多様性を持っているにもかかわらず、それが急激に失われて

いる。ホットスポットというのは注目すべき点ですよということです。

では、そんな日本の豊かな生物多様性を育てている湖沼をどうやって守っていけばいいのかということなのですが、先ほど菅先生の話でもノスタルジックに守るだけではなかなか難しいという話は何回か出てきたと思います。そこで最近出てきた考え方に、生態系サービスというものがあります。その生態系が現在そこに住んでいる人にどんな利益を与えているのかをきちんと目に見える形にして評価していこうという動きです。生態系サービスは、供給サービス、調整サービス、基盤サービス、文化的サービスの四つに分けられます。供給サービスは、フナなどの魚介類や鳥が捕れる、かんがい用水で飲み水も取れるということです。調整サービスは、潟があることによって洪水が緩和される、異常気象の急激な高温・低温が緩和されるといった気候の調整をするサービスです。基盤サービスは、生物多様性の希少種の生息地である、もしくは多様な生き物がいるという基本のサービスです。文化的サービスは、この景観が素晴らしい、観光地として潜在的なメリットがある、芸術や文化の題材として優れているといったようなものです。これらを何となく分かっているだけではなく、きちんと数字として目に見える形で評価して住民の中でも行政の中でもこの潟を守っていく必要性はこういったところにあるということを明文化しようという動きです。

5. まとめ

日本は、野鳥保護に関しては沿岸国が一体となった施策がなかなかうまく取れていないという現状があります。ロシア、中国、北朝鮮も含めて、厳しい国際情勢の中だからこそ、それとは切り離して環境に関する協力は一致団結して、フライウェイという1本のルート、ひとつながりのものとして潟を捉えていく必要があります。

生態系サービスを可視化し、この潟をどうして残さなければいけないのか、懐かしいからノスタルジックに残したいというだけではなく、どういった恩恵を受けているのかということをしっかり明文化することが重要です。

日本は豊かな水辺の生態系を持ちますが、保全はどうしても後手に回っています。

最後に、よく歌には国境はない、文学には国境がないといいますが、渡り鳥には文字通り国境はありません。ですので、国を越える鳥たちのためにも国際間の協力はどんな国際情勢にあっても継続して行っていくべきだと考えます。

(秋道) ありがとうございました。渡り鳥が日本海だけではなく世界の環境問題あるいは野生生物の保全の問題に関わるという枠組みで話題をご提供いただきました。

それでは今度は地上に戻って、地上面で日本海における潟湖の問題を考古学の観点から中野さんにご紹介いただきます。よろしくお願ひします。

「『邑知潟』と生きる歴史と文化」

中野 知幸（羽咋市教育委員会文化財課 羽咋市歴史民俗資料館 学芸員）

私からは、菅先生からもお話があった羽咋市の邑知潟について、私の専門としている考古学・遺跡の話も含めて話したいと思います。富山の方も羽咋に行ったことがある方が大

勢いるのではないかと思います。能登半島の付け根にあります。日本海側の羽咋に対して富山湾側にあるのが七尾市なのですが、「地溝帯地形」といって、北側の丘陵地形と南側の山形山地に挟まれた帯状の低地が、羽咋と七尾を結んでいます。これが私たちの住んでいる地域のとても特徴的な地形です。

現在の邑知潟は、黄色い線の範囲しかありません。しかし、いろいろな資料を駆使して復元に努めているのですが、黄色い点線の範囲ぐらいまでは復元できると考えています(図表2)。ということは、邑知潟の内水面交通を使えば、能登半島を迂回せずに、日本海側の羽咋から富山湾側の七尾まで、およそ3分の1は水路でショートカットできるという環境でもあるのです。日本海沿岸流に乗って能登の羽咋に入ってきたら、次に富山湾側へ出ようとした場合、邑知地溝帯と潟の水運も古代から絶好の交通路として活用されていたのだろうと考えています。

私は専門が考古学なので、羽咋の遺跡調査をするときに、復元した邑知潟がどれぐらいあるのだろうというのを出発点、基盤にすることがとても大事だと思っています。今の干拓された邑知潟の風景だけを見ていると、羽咋の歴史は理解できないと感じながら仕事をしています。

1. 羽咋と邑知潟

羽咋は能登の入り口に位置しているので、「奥能登」と呼ばれる珠洲や輪島に対して、「口能登」と呼ばれています。羽咋の代表的な観光地といえば千里浜なぎさドライブウェイがあります。富山県の皆さんも行ったことがあるのではないかと思います。邑知潟は、日本海側に羽咋砂丘が発達することによって、外海と内海が区画されて隔てられてできた海跡湖という潟です。海岸砂丘形成と潟湖の形成が連動するのは、日本海側にみられる特徴です。

千里浜なぎさドライブウェイは羽咋を代表する観光スポットでもあるのですが、海岸砂丘の砂の粒が非常に細かく、水を含むことでよく締まり、波打ち際を車で、大型バスでも走れるぐらい砂が安定しています。海水浴は車で波打ち際まで乗り付けるのが羽咋スタイルです。

2. 邑知潟の形成と復元

この羽咋を代表する海岸砂丘がどうやってできたのかというと、図表9は能登半島北側から見て白山を臨んでいる海岸線の画像です。今は放水路部分ぐらいしか邑知潟は残っていないのですが、薄水色ぐらいの面積が推定復元できます。邑知潟は、白山から手取川を経て運ばれてくる土砂が日本海沿岸流に乗って漂着しながら海岸砂丘が形成されることによって内海と外海が隔てられた海跡湖です。

これをさらに羽咋市の範囲で当てはめて考えていくと、外海が入江状に入っていたのが、海岸砂丘が伸びて発達することによって内海と外海が区画されます。そして南側の山地地形からは谷筋ごとに小さな扇状地がたくさん折り重なって陸化していき、古代の邑知潟の範囲になっていったと考えられています。羽咋の歴史研究をしていく上で、この成り立ちの原理を前提として知っておくことが非常に重要です。

おさらいしていくと、今でも、かつての潟の範囲を取り囲むようにして集落が確認でき

ます。図表 12 が 1947 年（昭和 22 年）の空中写真です。ピンク色の範囲が干拓前です。さらにその周りの、陸化しているのだけれども非常に濡れ色が強いのが江戸時代に埋められてきた範囲です。この範囲の田んぼは「四十石開（シジュッコクビラキ）」などの呼び名が小字・地名として残っていて、近代の新田開発で埋められたことがわかります。

1817 年（文化 14 年）の「能州口郡邑知潟絵図」（射水市新湊博物館所蔵）は、加賀藩の測量士である石黒信由が作った、邑知潟の測量図です。これがおどろくべき測量精度で、今の地形図にぴったり合います。これを重ね合わせると江戸時代の終わり頃の範囲が明確に見えてきます。さらに、図表 14 は国土地理院の 5m メッシュ標高図を重ねたものです。外側の黄色が 0～1m ラインです。集中豪雨などの水の増減をすぐに受ける範囲として、これぐらいの水面は復元できると思います。さらに外側の標高 1～2m の範囲は泥沼でヨシ、アシが生えるバッファエリアと考えられ、生活に適さない範囲というふうに復元できると思っています。

3. 遺跡から見た邑知潟

もう一度、羽咋の遺跡地図に戻ります。市内の遺跡の分布をみると、旧邑知潟の範囲が明らかで、遺跡の分布からも邑知潟が最大でこれぐらいの範囲だということは復元できると思います（図表 17）。

一つ紹介したいのは史跡吉崎・次場遺跡です。海から入ってきて邑知潟の入り口にある、弥生時代中期を中心とする遺跡です。弥生時代といえば、教科書で「稲作と青銅器祭祀」と習うと思うのですが、この遺跡からは、田んぼの道具や、青銅器の小型銅鏡など弥生文化が能登にも伝わったことを教えてくれます。しかも青銅器の鋳型の破片が出土しており、鋳造技術が能登まで入ってきていたことが分かることが重要です。青銅の鋳造技術というのは当時としては非常にハイテクノロジーで、普通の集落遺跡ではまず見つかりません。邑知潟を擁する羽咋が、このような新しい文化や技術をいち早く受け入れる環境にあったということです。この遺跡では、このほかにも弥生の鏡が 2 点出土しています。能登ではこれが唯一で、貴重な出土例です。羽咋が、能登の弥生文化の拠点になるような、文化の受け入れ口、ゲートウェイであったということを示す資料です。

弥生人たちは日本海沿岸流に乗って北上してくるときに、日本海に突き出している滝崎と呼んでいるこの地形を目印にして、長い海岸砂丘の先にある羽咋の場所を確認していたと思うのです。「あそこが羽咋で、いい港がある」と思って入ってきているのだと私は思っています。外海がどんなに荒れていても内海は非常に静謐（せいひつ）、静かです。ですので、天然のいい港として、潟の港として弥生時代以来、文化の受け入れ口として機能していたのだろうと考えています。

さきほども申し上げたように、羽咋は「口能登」と呼ばれていますが、その地域性は弥生時代、2000 年ぐらい前にさかのぼって解説していくことができるということが大切で、潟を復元していくことによって地域の歴史をより丁寧に解説することが可能となります。

4. 邑知潟の干拓となりわい

これから邑知潟の干拓について話していきたいと思います。弥生時代以来、邑知潟の潟淵に広がる低地を利用した水田耕作が行われてきました。また、内水面を利用した交通と

漁労がずっと続いてきました。現在の邑知潟は非常に面積が狭くなったとはいえ、現在も潟の漁師はフナを捕っています。吉崎・次場遺跡からは、フナやコイの魚骨も出土しているので、弥生人も恐らくフナを捕って食べていたのだらうということが分かります。

邑知潟は国営干拓で昭和 23 年から昭和 46 年の 20 年余りかけて姿を変えたのですが、干拓前は、腰に漬かってまでの稲刈りをしていたり、海水が逆流入してきて塩害被害があったりと、非常に条件の悪い田んぼでした。集中豪雨があれば田んぼがすぐに冠水してしまい、むしろ内水面の漁労と船の水運という使われ方のほうが本来的で、弥生時代から江戸時代まで、潟淵の周りを少しずつ新田開発して土地利用してきた歴史があるのです。ですが、干拓はこれまでの埋め立てとは異なる大工事なので、国営で大規模に姿を変えていくのです。「ヘドロとの戦い」と国営干拓事業報告書にも書いてあるのですが、一つ一つ杭を打って堤防を造って、水を抜いて陸化していくという、気の遠くなるような非常に大規模な仕事が行われました。

干拓によって田んぼができるようになったとはいえ、現在でも非常に軟弱な田んぼです。私の実家も干拓地で田んぼをしています。長靴がすねからひざ下ぐらいまでずぼっと入ります。これでも、圃場整備を繰り返し、改良されて条件が良くなってきています。私の祖父や祖母の世代は、胴長のようなゴム長を履いて田んぼで仕事をしていました。それがまだ家の納屋に残っています。それも近現代の邑知潟開発史の民具資料になると思っているぐらいです。

少しずつ条件は良くなってきていますが、半世紀以上たっても軟弱圃場なのです。現在でも邑知潟で田植え機やコンバインは負荷が強くてすぐ壊れてしまうので、メーカー開発の現場になっているほどです。邑知潟の干拓地で開発できた田んぼは全国に売れるといわれているような特殊圃場です。

つぎに邑知潟の漁労についてです。図表 32 は昭和 6 年頃の千路町の船着場で、潟漁師さんたちの舟がたくさん写っています。今でも邑知潟漁業協同組合があり、高齢化が進んで数は少ないですが、潟漁師たちがいます。かつてはフナ、コイ、ボラ、ウナギ、ナマズなど潟特有の漁労がありました。現在は、今ちょうどシーズンなのですけれども、寒ブナ漁のみを行っていて、もう専門の人はいません。

邑知潟の猟具は、羽咋市歴史民俗資料館が積極的に集めています。これも失われつつあって、たまに粗大ゴミに出たりします。粗大ゴミパトロールも行っていて、資料が散逸しないように努めています。注意深く回っていると、最近では逆に知らせてくれるようになりました。「潟の道具が出ているぞ」と電話をもらえるようになって、寄贈してくれるように働きかけたりと、取りこぼさないようにしているところです。

5. 邑知潟の食文化・伝承

潟の食文化としては、現在も寒ブナを刺身で食べます。フナの刺身というのと、とても驚かれるし敬遠されることが多いのですが、とてもおいしいです。羽咋の魚屋にたまに出ているので、この時期羽咋に行ってみたら食べられると思います。刺身のほかにも、かつては小ブナを開いてパリパリに香ばしく焼いた料理などもありましたが、これらは今では食べられなくなってきています。このような古くからの潟の料理を出す料理屋もなくなってしまいました。

船着場の風景も変わってきています。堤防護岸工事が何度も繰り返されることによって、ヨシ原が広がる潟の風景、潟淵の風景が少なくなってきました。邑知潟はハクチョウの飛来地としても石川県内ではとても有名なのですが、「ザ・潟」というべき風景の写真を撮ろうと思ってもなかなか場所が少なくなっていて、写真愛好の方たちも、かなり狙っていかねば撮れなくなってきました。こうやってライフスタイルが変わり、風景が変わっていく中で、少しでも資料と記録で残していくことに取り組んでいます。

もう一つ、邑知潟の名称の由来として「大蛇潟（おろちがた）伝承」というものがあります。羽咋には能登國一宮の氣多大社があることはご存じかと思いますが、その古縁起書には、ご祭神が邑知潟に住んでいたオロチを退治して地域を平定したという伝承があります。これは邑知潟の水害の原因をオロチにみたて、大水や氾濫の治水に努めたという伝承そのものであると思うのですが、氣多大社の春の例大祭の行事で「蛇の目神事」が行われています。大蛇の目玉に見立てた的を、弓で射って、刀で切って、槍で突く所作をする神事です。このように潟を舞台にした神事などの民俗事例や伝承や言い伝えなどの伝承文学がたくさん残されている地域です。

6. おわりに

この邑知潟がどのように形成され、これを埋め立て、干拓してきたかという土地利用史、潟の風景がどう移り変わってきたかということは、今日説明してきたように、できるだけ復元に努めているところなのですが、それが埋蔵文化財の遺跡調査の基盤にもなっており、そのほかにも生活文化史や伝承文学・伝説・伝承の記録にも深く関わっています。邑知潟は羽咋のど真ん中にあるので、邑知潟の歴史は、羽咋の歴史そのものとも言えます。邑知潟は、羽咋の歴史、文化、民俗、風土全てに深く関わっています。考古学はもちろん、近世の古文書史料を読む、民俗学の分野をよく調べ、民具、伝承文学、食文化のほかにも、動植物、歴史地理、砂丘工学、海岸工学、砂丘形成など、自然史的な部分も含めて総合的な研究題材と言えらると思います。

ディスカッション

(秋道) ありがとうございます。中野さんがおっしゃった、総合的な研究題材であるという指摘は一つのポイントになると思ったので、最後の方でもう一度確認を含めてみんなで考えていきたいと思います。

それでは時間がちょうど45分あります。少ないといえば少ないのですが、みんなでいろいろな問題を考えていきたいと思いますので、お付き合いよろしくお願ひします。

専業と兼業

(秋道) いろいろな問題があるのですが、まず菅さんと中野さんに質問です。潟はいろいろありますが、農業と狩猟、漁業、採集は、いつの時代から専業になったのでしょうか。商品経済に入る前の弥生時代ぐらいからか、あるいは近世・近代でも兼業だったのか。潟の利用は季節に応じてやってきたのでしょうか。秋田県の池でおこなわれているジュンサ

イ採りなんかは兼業的ですよ。潟では生業活動複合が時代的にどう変わったのか、専業さえもが辞めざるを得なくなったのか、地域を踏まえてどうなのか、伺いたいです。菅さんからどうぞ。

(菅) 潟の生活、生産の在り方というのは、秋道先生の生態人類学の方が専門になりますが、いわゆる多資源へ適応するという在り方です。適応というか、多資源を積極的に発見していくというものだと思います。その意味において、いろいろな資源に対応するいろいろな仕事があります。人類学者も民俗学者も他の学問もそうですが、農業と漁業を分けて考えていく思考が、どうしてもわれわれにはくっついているのです。

まず兼業か専業かで言うと、一応多くのところでは兼業と考えます。兼業という言い方もあれですね。要するに多くのものを利用していく。ですから、どれが主というものではない。ただ、これは中世から既に始まってくると思いますが、近世で特に江戸時代に強化されるのが米を中心とした価値体系で、米の生産の価値がより高まっていきました。そうすると、それをやっていくのが百姓、農民の正業、正しい仕事となりました。それが農民に一番求められるものとなりました。これは農民自身の問題だけではなく、支配者側の幕府と各藩からの要求で、農民が稲作する人たちという色付けが強化されていきました。これが近代まで、明治以降まで続いていきます。そういったものが強化されていくと、さまざまな資源を使っていく活動がどうしても兼業として見えてしまいます。ですから、逆に言うと、稲をしなくて漁業だけをするという内水面の漁師たちがいないわけではないのですが、数としては少ないです。

琵琶湖であれば、もっと大きな水面で、堅田漁民など、専業の漁民のようなものが発生します。日本海側の潟地では、漁業だけで食べる人たちがいないわけではありませんが、やはり農業と一緒にやっていくという人たちが多かったと思います。

これも重要なところなのですが、江戸時代から、魚や鳥はかなり商品経済に乗っていたということなのです。特に鳥です。私の本の宣伝になってしまいましたが、今、皆さんは鳥はニワトリ以外は食べないでしょう。ニワトリ以外を食べなくなったわれわれの生活というのは実はここ50年ほどなのです。特に石川県や富山県ではそうです。富山県射水市では、最近ではゴルフ場になっていてされていないようなのですが、谷仕切り網という、日本で1カ所だけの有名なカモ猟が行われていたなど、ガンやカモはとても身近な存在としてありました。先ほども少し話に出てきた石川県の片野鴨池も私は調査をしています。そこで坂網猟という、網を投げて捕る猟が今でも行われています。私はその保存会のメンバーでもあります。そういうところでも早くから商品経済の中にありました。今は売るのは当たり前ですけど。兼業と専業で言うと兼業で、兼業の場合も商業経済をベースにしたというのは江戸時代から始まっています。江戸時代以前はちょっと難しいところですが、そう捉えるべきだと思います。

(秋道) 中野さんはどうですか。

(中野) 羽咋では、やはり日本海交流を介して弥生文化が入ってくることによって、これまでの栽培、採集、狩猟を中心としていた生活にくわえて米作りが入り、「低地」が新天

地として新しい生活の舞台になっていきます。それ以来、だんだんと土地を埋め立てて田んぼを増やしてきた歴史があります。中近世に入って、潟は開発の対象や中世的な流通の舞台となり、米を中心とする経済システムができていきますが、すべての集落が新しい生活を獲得できたのではなく、地理的な制約から田んぼを得られなかった集落もやはりあります。こうした村は、半農半漁といえども、どうしても漁労が中心で専門的になります。しかし、田んぼが少ないことが絶望的だったのかというと、そうではなくて、潟での漁労は、それはそれで良かったらしいのです。漁労しか選択肢がない専門ということですが、やはりどうしても一握りでも田んぼが欲しいと思っていた、しかしそれが実現できなかった中で、干拓というものを受け入れていく歴史があります。このときには漁業権補償などで相当もめたとも聞いています。ですから、近現代に入ってようやく田んぼ中心の経済システムに入っていくということになりました。弥生時代以来の長い歴史の全体で見ると半農半漁で兼業してきた歴史ということになりますが、それが許されなかった集落もあったということです。

(秋道) 潟湖が埋め立てられようとした新田開発のような場合に、もし専門でハンティングと漁業をしている人がいたとしたら、埋め立てたら利益が上がらなくなりますよね。質問の趣旨は、そのような場合の相克が歴史的に事実としてあったのかが聞きたかったということです。

取りあえず稲作は、高橋さんの説明にあったように、生態系サービスで、田植えのときに五穀豊穡を祈り、秋になって収穫をお祝いして、しかも祭りのような文化サービスもセットでありました。そのような農繁期以外の農閑期にハンティングをしていました。渡り鳥がやって来るのは冬ですよ。それから雪のあるときにイノシシやシカを捕るのも冬ということで、季節的な人間の生業活動の変化のようなものと潟がうまくリンクしていたのではないかという気がして質問したのです。

高橋さん、冬場に、カモでもハクチョウでもいいのですが、ハンティングをする人々が肉を自分の家で食べる、あるいは売る、売ってもうけるかは別としておいしいものを食べるという、野鳥の食文化のようなものを、ご自分の研究の中でどう位置付けてこられましたか。変な質問かもしれませんが、衆議院本会議のような質問ではないので気軽に教えてください。

(高橋) 現役のハンターとはそんなに親しくする機会がないので、自分が手に入る中で資料で、例えば何とか町史や何とか村史のような分厚いものを見ていくと、どんな生き物がいるか、どんな農産物が採れたかという統計が必ず出ていますよね。なぜ統計が出ているかといえば、換金性が高いものだからちゃんと産物として記録していこうという働きが出たのだと思うのです。

今、ハンティングをしている方はそこまでではないので、恐らく行政としてもそこまで力を入れて統計は取っていないのではないかと思います。ですので、なりわいの一つとしての狩猟であったからこそ、村の記録に今年は何が何羽捕れたというのがきちっと残っていったという過去はあったのではないかと思います。

もう1個言いますと、狩猟は今は娯楽という言い方をすると真面目にやっている方には

失礼なのですが、昭和 30 年、40 年ぐらいまではハンターの方は数がたくさんいたのです。今で言うとゴルフや釣りのような感覚で週末にハンティングに行くという文化があったようです。「サザエさん」の旦那さんのマスオさんは猟銃を持っているのはご存じですか。狩猟免許を持っていて、アナゴくと 2 人で休みの日に鳥を撃ちに行く話もあります。それぐらい普通のサラリーマンでも手が出せる趣味だったのです。なりわいから離れたところに移り、だんだん人口も減っていき、今はどういった経済効果、生態サービスとして成り立っているのかが見えてなくなっているのが現状だと思います。

埋め立て後の鳥の状況

(秋道) もう一つ高橋さんにお聞きしたいのは、潟湖が埋め立てなどでなくなったりした状況で鳥はどうしたのかという問題です。私の知っている限りで言えば、九州の博多の東に和白干潟があります。福岡は狭くて山が迫っているのに人口が増加して、住宅地がなく、大マンションを造るために何カ所か埋め立てたのです。そして、和白干潟に飛来してきたクロツラヘラサギなどの絶滅危惧種が来なくなって他の干潟に避難した、違うところに生息地を見つけたということを現地で確認したことがあります。潟湖の場合は日本海にあるでしょう。新潟県は多いですね。その場合、鳥は行くところがなくなったら、オリエンテーションでちょっと近くのところへ行くというようなことを実際にやっているのですか。

(高橋) 例えば、片野鴨池で越冬しているカモは毎日夜になると近くの水田に行って落ち穂を食べたり、河原へ行ってイネ科植物の種子を食べたりして昼間にまた戻ってくる生活を繰り返しますが、必ずそれを毎日繰り返しているわけではなく、採食地から別の池に行き行って休んだり、別の池から同じ田んぼに来たカモがつかれて片野鴨池に戻ったりということをやんわり繰り返しながら生活しているのです。例えば A 池、B 池、C 池とあって、真ん中の B 池がなくなってしまった場合は、餌場との往復で、記憶にある近くの湖沼に移るのが恐らく一般的だろうと思います。やはり飛石が 1 個抜けてしまうので、飛石の周りを採食場所に使っていた記憶を基に、近くでいい場所を探すのではないかと思います。

(秋道) 採食とおっしゃいましたが、野生の状態で潟湖と周りのスワンプにある植物の種子などを食べる採食パターンから、稲作が始まって稲刈りが終わって、もみがまだあるようなところに行って索餌するようなパターンへと、大きな時代的な変化が渡り鳥の行動にあったのか、あるいはあまり彼らは意識していなかったのか、どうですか。新田開発で餌場が増えたような気もするのです。もちろん湖が減ったとも言えるのだけれど、そのあたりは先ほどの話のトレードオフでどうなるのかというのが気になりました。

(高橋) 富山県では、一万数千羽越冬していると言いましたが、その 8 割、9 割がマガモ、カルガモ、コガモの 3 種類です。これらは非潜水ガモ、潜らないカモといい、陸上で餌を食べるのを主としています。これらに関しては、昼間休む水辺には特に餌資源を求めおらず、日中は安全な広い水面さえあれば極端な話 3 面コンクリートの広い水路でもい

いことになるので、そんなに大きな影響は出てこないのではないかと思います。近くに耕作地がたくさんあればということですが。ただ、潟湖で言うと、例えば宍道湖では、ホシハジロやキンクロハジロのような、潜って貝を食べる水鳥の数が圧倒的に多くなります。そういったものたちに関して言えば、潟がなくなってしまうたらそこは生存することができない場所ということになってしまうのではないかと思います。

(秋道) そうか。やはり鳥の種類によって食性が違うから、それが人間活動の変化とタイアップしている、リンクしているということですね。

(高橋) そうですね。やはり落ち穂や二番穂は、特にマガモの仲間では主要な餌になっていると思います。

(菅) その点で言えば、ガン、カモというのは、江戸時代は害鳥だったのです。かなり大きな害鳥でした。鉄砲を持つことが禁じられた江戸時代で唯一許されたのが鳥脅しの鉄砲で、村の中に1丁などきちんと目録の中に書かれるのです。ガンやカモというのは狩猟者にとってみれば資源なのですが、それをうまく捕れない人たちにとってみればものすごい害鳥で、ガンの群れが田んぼに降りてきて、そこから1時間ぐらいたったら、落ち穂ではなくて生えている方が一斉になくなるのです。それぐらい恐れられていました。「鉄砲をください」という書付も結構残っています。

先ほどの片野鴨池の面白い話もあります。片野鴨池は石川県のラムサール条約の中で最小ぐらいの小さな池で、そこにかつて鳥がたくさんいたのですが、今はどんどん減っているのです。これはなぜかという今の話につながるのですが、柴山潟や今江潟が禁猟になってしまったのです。前はそこで鉄砲を撃っていたらそれが逃げてきたのですが、そこがサンクチュアリになってしまったら別に片野鴨池に来なくてもよくなります。今、「誰か柴山潟で鉄砲を撃ってこい、脅してこい、そうしないと来ない」と坂網猟師たちがよく冗談を言っています。鳥の全体量は増えているのですが、池に来る量は減っているのです。日本野鳥の会の田尻浩伸さんという人がそのことについて研究しています。資源の全体量と池ごとの資源量は状況が異なってくる可能性もあるということです。

(秋道) カモにしたわけですね。

(菅) そうそう。いいカモになりました。

(秋道) 分かりました。やはり潟の問題では時代変化を考えるべきなのと、地域によって随分違うと思ったのは、地元の例で言うと放生津潟です、一度しか行ったことがないのですが神社があって、全然面影がなかったのです。昨年行きました。放生津潟の東側の潟の辺縁部に小竹貝塚がありますよね。あれは縄文の、北陸新幹線を造るときに見つかった貝塚です。ヤマトシジミのものすごい包含層があるのですよ。ネットで見ましたが、すごい量のヤマトシジミが利用されていた。

ヤマトシジミは塩分と淡水がうまく混じる、しかも水温が適温であるところしか採れな

いのです。宍道湖でも採れるし、北海道のペンケ・パンケ沼や網走湖、岩木川河口部の十三湖でも採れる。潟湖の貝類資源をもうちょっと考古学者は真面目にやった方がいいのではないかと思います。庄川の河口部で昔ハマグリが採れたけども、今は採れない。あれは海水性の貝です。汽水性の貝類の代表であるシジミは、考古学を含めて、発掘された場所の問題などを研究したら、とても面白いと私は思っているのです。

今、シジミも少なくなってきたなと思います。大きさも小さいでしょう。私は、富山の観光興いで、シジミの復活と観光産業と潟湖とカモ料理などをセットで考えることを県の観光振興課などでしていただければと思っています。それはぜひ今回のシンポジウムの副産物で、県の皆さま方あるいは観光業界の皆さま方にお考えいただきたいと考えています。

まだ20分あるので、お互いの質問がもしあればご自由に、どんな質問でも結構ですので、高橋さんから中野さん、中野さんから菅さん、菅さんからお二人へなど、お聞きかせいただければうれしいと思いますが、いかがでしょうか。はい、高橋さん。

森と潟の関係

(高橋) では菅先生に聞きたいのですが、今話に出た小竹貝塚の周りには他にもいろいろな遺跡があります。私の職場のファミリーパークと同じ呉羽丘陵の近くです。潟湖があって、少し小高いところに住宅があって、その後ろに森があるではないですか。その三つがセットになっていて、さらに多様性が高まって、例えばシカの角が出てきたり、イルカの骨が出てきたり、シカの角で作った釣り針が出てきたりと、さらに副次効果がありますよね。潟湖と住んでいるところ、森という要素は、潟湖の文化が育つ上でどれぐらいの意味があったのか、それが無いところとあるところではどう違って来たのか、もし知見があればお伺いしたいです。

(菅) 非常に面白いです。そのようなところは非常に有利なのです。堀上田の二つの類型で開発型と安定型と申しましたが、開発型でやっていくところは、後背に山を持っている、そして目の前の水面に伸びていく。こういうところはある意味好条件な地域です。

低湿地のところ、困ってしまう資源が、一つは多すぎる水ですよね。低湿地の村ではもう一つ大きな困ってしまう資源があるのです。なくて困る資源です。何かというと薪炭です。いわゆる薪です。低湿地の中に村を建てると山がありません。これは秋道先生の専門ですが、いわゆるコモンズと呼ばれている入会(いりあい)・入山(いりやま)など、かつて日本の農村は山をみんなで共同で持って薪などを採っていました。それは生活にとっても必需品ですから、個人が独占するのではなくてみんなで分けるということを日本は入会という形でやっていたのです。

ところが、新田開発で湖沼の畔に村をつくってしまうと、山がないので、一番困ってしまうのは薪炭です。それは本村の方に頼ったり、薪を山から買ったりするという生活があったのです。後背に山があるパターンのところは有利で、そういうところも一つあるのです。ただ、水田安定型の堀上田をしているようなところはそのようなものがないので、結構大変な集落ということになります。そういうところは他の村とのつながり、ネットワー

ク、経済関係を結んでいないとできない。逆に言うとそのようなネットワークがあったということだと思います。

(中野) 今の先生の話の事例の一つとして、羽咋市の低地の集落では、薪を採るための山を低地から遠く離れた中山間地に飛び地のようにして持っている集落が複数あり、現在でも地籍として土地の所有が残っているところがあります。燃料のためにどうしても里山が必要だったので、低地の潟淵に住んでいる集落では、全員で山の手入れ、メンテナンスに行く日が定められていました。潟淵の低地からは、かなり距離は離れていますが、山はどうしても切り離せないところがあったというふうに聞いています。

(秋道) そうですね。今話を聞いていて、潟であっても海と山との関係、相互作用が生活の中では重要であったということで、一つ造語を考えました。最初にあったのは里山でしょう。里海が出てきた。そのうち里川とつくった人がいるのです。われわれは今日、2023年(令和5年)1月21日に富山で「里潟」というものをつくって、富山発信にしませんか。

里潟は、菅さんのご発言では「半」で、完全な世界ではない。「半」は許容力があり、敗北感も含めた、反発力を持っている概念なのです。中途半端という「半」の使い方ではなく、ヨーロッパ式の決定論ではなく、曖昧な部分を残した、動態、ダイナミズムを含めた捉え方をした世界である。それは菅さんもご指摘のようにノスタルジーだけでは駄目だということです。そのあたりの世界認識を皆さん共有していると思うので、ここで潟の話で「半」で締めくくっても何らおかしいことではなく、むしろ新しさを意識せざるを得なくなって、非常に興奮しているのです。興奮ついでに、「里潟」という造語を考えました。「里潟」は海と山とをつなげる境界領域の概念で、地域住民主体の、伝統的なだけでなく、新しい時代に向けての利用を促す場であり、だから観光の場であり、みんなの憩いの場であるということを私は感じます。

先ほど出た十二町潟に、平安時代に大伴家持が行っているのです。船を浮かべて十二町潟で思いに浸っているという歌があります。万葉集の中で潟を歌った歌を、皆さんお時間があったら探してみてください。日本海の潟を歌った歌、詩、俳句、何でもいいから集めて、富山県から句集を写真入りで景色の写真を入れて発刊できたら、潟の魅力を発信できると思います。悲しさとわびしさと楽しさと希望と悲哀感を秘めた潟の世界を描くのはどうかという気もしました。というのは単なる思い込みです。

海から見た山

(秋道) 邑知潟で私は思ったのですが、今、私は九州の世界遺産の沖ノ島と富士山をやっている、沖ノ島の研究会に中野さんに来ていただいてご報告を頂いています。私がメインテーマとってきたのは、海から見た山なのです。海から見た立山の写真は大きな山だけではありません。日本海沿岸で、大きな山は立山、白山、東北の鳥海山、伯耆大山がありますよね。あれらは高い山で海から見ることはできるのですが、富山湾の中にも、石動山のような山もあって、日本海学の中では広く稚内から対馬、壱岐辺りまで、海から見た

山というのを考えていきたいと考えています。呂知瀉も海から見た呂知瀉、古墳の話の中野さんに追加していただきたいのです。

(中野) 海から羽咋という地域がどう見えているかという、北上する日本海沿岸流に乗って、新しい弥生文化、古墳造りの技術や文化を持ってやって来る人たちにとっては、羽咋は低地で高い山がなく、いわゆる海上標識やランドマークと呼べるものがないところでは、宝達山という能登最高峰の山がありますが、標高は 634m の低山で、日本海沖からみると海上標識とするには十分ではないというのが船に乗っている人から聞いた話としてあります。

では、弥生時代以来の日本海交流で、人々が羽咋の位置をどのように認識していたのかと考えると、日本海に向かって丘陵が舌状に突き出している滝崎と呼ばれる地形があります。この地形が、沿岸づたいに海を行き来する人たちにとっては「ここが羽咋だ」と知らせる、絶好のランドマークになっていたと考えています。

今でもこの先端部分に滝灯台という大きい灯台が置かれているのですが、この地形自体が古代から変わらないランドマークだったと思います。金沢から羽咋へずっと何十キロも続く長い海岸砂丘の先に最初に目にする能登の地形です。それを目じるしに羽咋へ向かえば、呂知瀉という内水面の港に入ると認識されていたと考えています。私たちも、のと里山海道という海浜道路を北上して運転するとき、一番手前に見える滝崎の地形を目当てに、あそこが羽咋だと私たちも認識します。

この「滝崎」が、羽咋では非常に象徴的な場所と考えていて、それを裏付けているのが、丘陵の南側の段丘ぎわにある、滝大塚古墳という全長 90m 級の能登最大級の大型古墳の存在です。海から見えること、見せることを意識した海古墳が立地していることから、ここが羽咋の人たちにとっては、外部と交流するうえで非常に重要な場所と認識されていたのだろうということが分かりますし、すぐ近くには能登國一宮の氣多大社が鎮座しています。羽咋は弥生時代以来の日本海交流での文化の入り口となった地域性があり、そのランドマークとなった滝崎周辺には、地域を象徴するような、神も宿る神聖なロケーションがあったと考えられ、それを示すように大型古墳、古代祭祀遺跡、古代寺院遺跡、そして現在につづく能登國一宮というように、信仰に関わる遺跡群が、この一帯には集中しています。

(秋道) あそこの出っ張りは海に出ないと分からないですね。高い山だけ見て航海術を考えたら駄目だと、水平線上の出っ張りを考えるのが重要だと思いました。

それと関連して、もう一つ抜けているのは、海流なのです。日本海の流れを東京大学のグループがコンピュータで一昨年調べた研究では、対馬暖流は朝鮮海峡、対馬海峡に入ります。そうしたら大体、九州の玄界灘から山口、島根、鳥取、兵庫、京都、福井辺りまでは沿岸域を進むのです。ところが一部は朝鮮海峡に入った途端に、朝鮮の釜山、北へ行き、そして沿海州をぐるっと回るほどに日本海の中を通って、また津軽海峡辺りで集まるのです。一つ言えるのは、福井県の越前辺りまでは対馬・壱岐の影響が真っすぐ来る。あそこでできた筏が真っすぐ越前岬に到着する。ところが、そこを越えて能登半島に上がるときに、羽咋の出っ張りが出てくるということです。

大国主命に関連した氣多大社の由来も、大蛇退治の先ほどの話もそうですが、日本海の西の方では、ここがポイントなのです。しかもそれがラグーンの近くにあるということで、富山、石川を含めて、この地域の古代からの重要性を今日存分に邑知潟を含めてご紹介いただきました。この話はインパクトが大きいと思うのです。日本の古代の古墳群の分布と歴史を考えたら、九州、丹後の古墳群、それからここの古墳群は非常に重要な意味を持っているということが再確認できたということを皆さんと共有します。

まとめ

(秋道) 今日は日本海の潟を巡る文化史、生態史の話について、お三方から基調報告とコメントを含めてご紹介いただきました。非常に分野が違っていたのでどうなるかと思ったのですが、意外と潟に収れんした議論ができました。

一つ目は、高橋さんが紹介された生態系サービス論です。これは21世紀になってから国連などで言われだしました。供給サービス、維持サービス、文化サービスのようなもので、潟という生態系をどう捉えるか。生態学の教科書のようなものにはよく載っていますが、これで潟を捉えたら結構うまく適合できる例があったということを確認しました。

二つ目は、基調講演であった、何度も申された「半」の話です。「半」という世界観を皆さんとぜひ共有したいと思います。中途半端な世界の「半」ではないということです。ヨーロッパ人の考えるような、あるいはこれまでの日本の学会等で議論されてきたような「半」に対する偏見のようなものではない。ただし、近代化がもたらした「反」、近代化が何を私たちの心にもたらしたかということについての菅さんのご指摘は傾聴に値するし、これをノスタルジアに落とし込むべきではない、新しい生き方の材料として「半」の生き方を学ぶような姿勢、つまりウィズコロナと似たようなもの、コロナがあるけれども、コロナにめげずに頑張るような新しい生き方を潟から学ぶことができたのではないかと思います。

そのためにはどうするか。演説は菅さんにお任せするとして、学問あるいは皆さん方の研究する態度は、中野さんに最後に紹介いただいた、いろいろな分野が共同して、垣根を越えて越境して考えるということだと思います。それこそ自分は「半」だけれど、みんなでやったら「全」になる、みんなでやってもまだ「半」だったでもいいのですが、そのような態度を持っていくことこそが、学問あるいは産業発展を連携活動によって進める一つの大きな刺激になると思います。

2023 年年明けの富山の日本海学シンポジウムはこれにてお開きとさせていただきます。長時間のご清聴ありがとうございました。